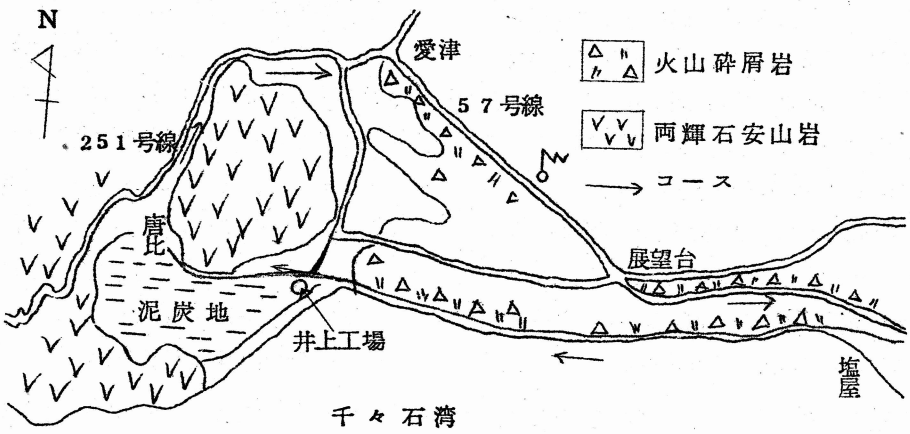
第２９回（昭和４１年５月２２日）

雲仙山麓の火山地質と唐比（からこ）の泥炭地

（５万分の１，肥前小浜）



愛野展望台に１０時に集合。今日は県南・県北の合同巡検で参加者が多く大そう盛会である。鎌田先生から今日の予定やルートなどの説明があり，千々石へ向ってバス道路を下る。まもなく左側の畑の上の露頭を見つけ，調査を始める。５～１０㎜の角閃石と斜長石を含む角閃石安山岩質の泥流（？）で，風化面で角閃石と斜長石の美晶が採集できる。中には美事な双晶をなすものもある。軟弱な基質もろとも持帰り水篩して多くの結晶を得ることができた。ちょうど造岩鉱物の授業をやっていたので，さっそく生徒に産状を語り，標本を観察させた。理振標本は黒色の不純物が結晶面についていて，面がみえず，生徒のレポートには斜長石の色が黒と記されていて，説明に手をやいたが，今日の標本でこの心配も無くなったことを喜んでいる。生徒の知らぬ地区の標本より，教師が知っていて産状を説明してみせる標本の方が生徒の興味を強くよびおこす。

バス道路ぞいには相次いで好露頭がみられる。いずれも細粒の褐色の凝灰岩層の直上には数１０㎝～１ｍ程度の礫層がみられ，上位へ次第に粒度を減じながら細粒の褐色凝灰岩層へ移り変る。このラミナ面は数度以下のゆるい傾きであるが，道路の勾配と逆傾斜なので，傾斜が大きいように見える。千々石の砂浜が見えるようになった頃，ラミナ面の傾きが次第に増し，最大４０°程度に達したが，これは断層による乱れであった。この附近の砕屑岩は粗い礫から細粒の凝灰質部へと幾サイクルかくり返していて，凝灰質部は大てい褐色になっていて，地表で風化したことが考えられる。千々石の浜へ下りて昼食をとる。砂浜には美事なカスプがみられる。

午後は先の方へ進んだグループと後のグループはトランシーバーで連絡をとりながら唐比へ向う。海岸の直立する崖は有名な千々石

断層崖で，午前に見たのと同じ火山砕屑物が厚く重なっている。岩相がほぼ同じなので，とくに近寄ってみることもなく先を急ぐ。唐比へ大部近づいた頃，小川でメダカが元気良く泳いでいるのをすくって，鎌田先生はお嬢ちゃんのお土産とされた。腰にハンマー，背にリュックの先生が，片手にメダカを入れたポリ袋を下げた姿はまさに良きパパぶりでとてもほほえましい。先生の期待にこたえてかそのメダカは現在も元気で暮している由。

唐比(からこ)に入って泥炭をみる。砕嘴が伸びて入江をせきとめ，ラグーンができ，この中に泥炭が堆積した。井上産業に寄って説明をききり試料を採集する。中には木材の破片やドングリの実なども保存されている。これをロータリーキルンで乾燥し粉砕し，脱臭剤を作るとの事で，目下操業準備中であった。

唐比泥炭の分析結果は次の通りである。(%)

水分9.0　灰分59.8　揮発分23.0

固定炭素8.2　発熱量1,770カロリー

泥炭工場を出て，泥炭地（水田地帯）の北側を行くと，両輝石安山岩の露出している。雲仙火山より古い火山岩で筑紫溶岩に対比されるものであろう。道を北にたどって愛津で再び国道57号線に出合い，そこで解散する。

（堀口承明記）

参加者　25名（正会員・一般21，学生4。他に長崎造船短大生多数）

長崎県地学文献目録

（地質の部　その Ⅶ）

8.　長崎・多良岳火山岩地域

（現世堆積物を含む）

発行年	著　者	論文名，掲載誌，巻，号，頁
1912	大日方順三	20万分の1「長崎」地質図幅並同説明書　地質調査所
1919	小倉　勉	多良岳火山地質調査報文（図版16）　震予報　90，1－49
1929	森　寿美衛	多良嶽西麓地方の地理的景観（1）　地球　12，6，420—436
1930	〃	多良嶽西麓地方の地理的景観（2）同上　13，3，202—213
〃	矢部　長克 遠藤　誠道	肥前茂木化石植物群及び其の地質上の意義 地学雑　42，500，1－9
〃	YABE, H.& ENDO, S.	Mogi Fossil Flora of the province of Hizen and Its Geological Significance. Proc. Imp. Acad. 6, 7, 275－278
1935	赤木　健	7万5千分の1「大牟田」地質図幅および同説明書　地質調査所
1953	SHUTO, T.	A Study on the Foraminiferal Assemblage of Omura Bay, Nagasaki Prefecture, Kyushu. Jap. Jour. Geogr. 23, 127－138.